

日産プレジデント基金 ～被災地の子どもたちに笑顔を～ Newsletter

VOL.4
2014.3



日産プレジデント基金は、日産自動車株式会社社長カルロス・ゴーン氏が発起人となって募った寄付金を活用し、東日本大震災で被災した子どもたちの笑顔を取り戻すためのプログラムを、日本NPOセンターが多分野のNPO、児童館、学童保育と連携し、実施するものです。あそびプラスOneプログラムでは、児童健全育成推進財団の協力を得て、子どもたちの日常的なあそびの拠点である児童館に、多様な専門性を持った県内外のNPOが訪問してプログラムを提供しています。おでかけプログラムでは、被災してから、自由に外で遊ぶことが制限されたり、フィールドに出る機会が激減している子どもたちに、長期の休暇を活用して、フィールドに出かけ、さまざまな学習や体験、あそびを通じて、元気に過ごせる時間を提供しています。

<2013年10月～2014年3月までの実績>

あそびプラスOne：22団体が130館でプログラムを実施。

おでかけ：15のプログラムを実施。



あそびプラスOne プログラム



運動あそびをお届け

にわか学童クラブ/きんにく〜ず

2013年12月24日、福島県福島市の庭坂小学校体育館では、小学1年から6年までの46人の子どもたちが笑顔一杯で走り回り、運動あそびに夢中になっていました。指導員の佐原靖子さんは「冬休みに入って学童クラブで過ごす時間が長くなった子どもたちにいろいろな活動をさせてあげたい。体を動かすのが大好きな子どもたちに素敵なクリスマス・プレゼントができました」と嬉しそうでした。



とにリレーして相手チームのランナーを捕まえるまで続けます。何度も繰り返すうちにどんな順番で走ればいいのか作戦を立てるようになり、チーム一丸となって勝利をめざしました。

最後は、きんにく〜ずと児童館の先生による大人チーム対子どもたちで「リバーシ」という大型オセロゲーム。「最後に子どもが1つのチームとして大人と対戦することで、子どもたちの心を一つにまとめる効果を期待しています」(ゆ

きねえ)。子どもたちは体育館に到着するなり、きんにく〜ずのスタッフに飛びついたり、走り回ったりと元気一杯! この日のスタッフは、ゆきねえ、つんつん、ひとし君、じゅんママの4人…準備運動から楽しい話術と動きで子どもたちを惹きつけます。大好きな「なめこのうた」がかかると、最前列に飛び出し目を輝かせて踊る子どもたちもいました。

2チーム対抗の鬼ごっこでは、スタッフに全速力で追いかけて、子どもたちはキャーキャー歓声を上げて逃げ回ります。1コマ30秒の鬼ごっこですが、チームを入れ替えながら数種類を繰り返すので、物凄い運動量です。

圧巻なのは「トムジェリ」と名づけられたリレー…トラックの対面からそれぞれスタートし、1周ご

きねえ)。結果は、子どもたちの圧勝!

「あ〜楽しかった!」「もっと遊びたかった」と言いながら、リバーシを片付け、ゼッケンを大切に畳んでくれる子どもたちの姿が、この日のプログラムの成功を示していました。



きんにく〜ず

仙台市内の児童館・児童センターの職員が2008年に結成した「体を動かすのが大好き!!」な子どもたちでいっぱいの児童館をめざして、運動あそびを本気で考え、本気で遊び、本気で楽しむグループ。活動の届け先に事前にDVDを送付して子どもたちが好きなリズムあそびや音楽を確認したり、現場で子どもたちの様子にあわせてプログラムを組み替えたり、事後に反省会をしたり、常に子どもたちのことを考えて自己研鑽しています。



おでかけ プログラム



FUKU × FUKU 子どもスキー教室 + 大新年会

山形避難者母の会

2014年1月12日~13日、山形に避難中のママと子どもたちが、福島に帰還した元避難家族を山形蔵王で温かく迎えました。そこに、福島で暮らすパパも合流して、楽しい週末を過ごしました。

山形避難者母の会代表の中村美紀さんは、「この保養プログラムは、避難者と故郷の絆をつなぎ、福島に帰還した親子が放射能の不安を素直に話せる仲間と出会い、元避難先に暮らしている福島の友とつながる貴重な機会なのです。」と語っていました。

1月12日の昼に福島をバスで出発した元避難家族7組22名は、は、ワクワクしながら午後4時前に山形蔵王の宿泊施設に到着しました。ゆっくり温泉に入ったり、部屋でのんびり過ごした後は、総勢66名(うち子ども41名)での大新年会です。食後の大広間は、久しぶりに会ったお友達と追いかけてこをしたり、パパとじゃれあったりする子どもたちの笑い声で満ちていました。あちこちでママたちの井戸端会議が始まりました。部屋を移しての二次会も盛り上がり、パパたちが一杯やりながら男同士の交流を深める機会にもなりました。あるパパは、「ママと子どもたちが避難先で孤立するのではとの不安もありましたが、避難者同士が助け合う自分の居場所を持ってきてくれてホッとしています」と胸の内を明かしてくれました。

翌日は子どもたちが楽しみにしていたスキー教室。インストラクターの指導で、初心者の方の低学年の子どもたちもリフトに乗って滑ってこられるほど上達しました。子どもたちは「楽しかった!」「またやりたい!」「山形では授業でスキーがあると聞いていて、ずっとやりたいと思っていたのでよかった」と大喜びでした。

福島から参加したママたちからは「福島から山形までの移動は大変で正

直個人ではなかなかできないので、今回の保養プログラムはとてありがたかったです」「母子家庭なので、なかなか県外に保養が出られず、今回は親子で楽しめ、私自身の息抜きもできました」と好評でした。

スタッフの方々は、「久しぶりに会ったパパと家族みんなで遊んでいた避難中の子どもたちのいきいきとした顔、雪が降っても外あそびさせていなかった子が思いっきりソリ滑りをしていた時の顔、それを見るお母さんたちの穏やかな笑顔が忘れられません。これからも当事者の声を聞き、当事者の思いに沿ったプログラムを続けていければと思います」と決意を新たにしていました。



山形避難者母の会

福島第一原子力発電所事故により、福島県から山形県に避難してきた母子避難・自主避難者が互いに支え合おうとできた当事者団体。託児サービスの他、母親の交流イベント、キッズスクールなどを企画・運営している。



震災から3年を迎える福島の子どもの状況と これからの支援

特定非営利活動法人ビーンズふくしま
東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口 **中鉢 博之**

東日本大震災の発災より3年が経ちました。福島でも沿岸部では津波による被害で、家や学校、あそび場をなくしてしまった地域もありますが、同時に起こった福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染がさらに広範囲に住民の生活環境や子育ての環境に影響しています。

原発周辺地域の子どもたちは、故郷の避難指示はまだ解除されずに、避難先の仮設住宅や見なし仮設住宅等での生活が今でも続いています。また原発から離れており、政府の避難指示を受けていない地域でも、放射線の影響により外で遊ぶことをためらったり、子どもが食べる食材が本当に安心なのか、そんなことを心配しながらの生活が続いています。子どもを守るために、一時的に県外への避難を選択した子育て世代も多くおり、一部福島県に帰還した方もおりますが、まだ帰れずにいる方もたくさんいます。震災とその影響は、まだじわじわと続いているのです。

一方で、福島で暮らす私たちも無力ではありません。子どもの育つ環境を取り戻すために、親・支援者・多くの大人たちが知恵をしばり、汗をかきました。屋内あそび場の整備、幼稚園や保育所でも自分たちでできるところは除染を進めました。食物と放射線に関する勉強会も各地で開催されています。県内外の団体によって自然体験や保養のプ

ログラムも行われ、たくさんの子どもたちが参加しています。放射線量が低い地域には、冒険あそび場も設置され、子どもが外でのびのびと遊ぶ様子も再び見られるようになりました。かつて、これだけ子どものあそびや成育環境に目が向けられ、その意味について大人が考えたことはなかったのではないかと思います。

震災・原発事故の影響は、まだこれからも長く続きます。しかし、そのマイナスの影響をプラスに転化する。そのための種があちこちに蒔かれ、芽吹き始めているのです。

「レジリエンス (resilience)」という単語をお聞きになったことはあるでしょうか。「回復力」、「復元力」などとも訳される言葉ですが、困難な体験やトラウマを経たとしても、全てが深刻なPTSDに陥るわけではなく、人が本来持っている回復力を発揮させることによってその困難を乗り越えていくことができるとする考え方です。福島の子どもたち、そして親や支援者が持っている「レジリエンス」をどう活かしていくのか、そのためには、困難や悩みに共に寄り添い、伴走していく支援が今しばらく必要です。福島を、福島の子どもたちを忘れないでほしい。そしてこれからも共に在り続けてほしい。震災後3年を迎える福島からの切なる願いです。

表紙の写真提供：仙北児童センター(盛岡市)、折立児童館(仙台市)、寺岡児童センター(仙台市)、燕沢児童館(仙台市)、石巻地区・門脇地区放課後児童クラブ(石巻市)、大街道地区児童クラブ(石巻市)、緑児童クラブ(猪苗代町)、山形避難者母の会(山形市)

編集・発行：



日本NPOセンター

認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター
〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-2-1 新大手町ビル 245
TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856
Email jncenter@jnpoc.ne.jp
URL www.jnpoc.ne.jp
Twitter jnpoc

運営協力：財団法人児童健全育成推進財団
制作：一般社団法人経団連事業サービス